

口頭発表

保護者が感じるイルカ介在療法の効用に関する検討

石高志保^{1)*}・川名はつ子²⁾・扇原 淳²⁾

1) 早稲田大学大学院人間科学研究科

2) 早稲田大学人間科学学術院

A research on the effects on dolphin assisted therapy evaluated by family

ISHITAKA Shiho^{1)*}, KAWANA Hatsuko²⁾, OGIHARA Atsushi²⁾

目 的

イルカ介在療法利用者の保護者が感じるイルカ介在療法の効用について明らかにすることを目的とした。

方 法

施設Aで実施されたイルカ介在療法参加者のうち2010年4月から2014年11月に参加した172家族分を分析の対象とした。資料のうち、家族の中で疾患をもつクライアントの基本属性と、その保護者による「イルカ介在療法に期待すること」、「前回にセラピーを受ける前と受けた後で変わった様子(2回以上の参加家族のみ)」の自由記述項目を分析した。なお本研究は、早稲田大学人を対象とする研究に関する倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号:2014-119)。

結 果

クライアントの基本属性は、男性78人、女性55人、未記入39人であった。年齢は、19歳以下が112人で全体の65%であった。居住地域は、関東地方が最も多く、次いで、九州、近畿の順であった。国際疾病分類第10版に基づくクライアントの原因疾患に

ついては、精神及び行動の障害がもっとも多く62人、先天奇形、変形及び染色体異常24人、神経系の疾患21人であった。保護者がイルカ介在療法に期待することとしては、表現力の向上、行動の改善、リハビリテーションが上位であった。イルカ介在療法参加後の変化としては、表現力の向上、行動の変化、イルカへの興味に関しての記述がみられた。

考 察

イルカ介在療法利用家族は、所在地の沖縄以外の関東を中心として遠方に居住する者が多かった。関東には、イルカ介在療法を提供する施設が不明であることから、提供される療法の内容によって当該施設を利用している可能性が高いと思われた。また、保護者は、クライアントのイルカ介在療法参加後の変化として、コミュニケーション力の向上を挙げていた。Stumpfら(2014)は、イルカ介在療法によって、ダウン症候群や精神遅滞をもつ子どものコミュニケーション能力が向上することを報告しており、今回の結果からも、同施設で行われているイルカ介在療法に同様の効用がある可能性が示唆された。今後は、同施設のイルカ介在療法のプログラム内容の検討に加えて、他の動物介在療法との効用の差異の検討、対照群を設けた研究デザイン、およびクライアントの生理的指標を用いたイルカ介在療法の効用に関する分析が必要である。

謝 辞

本研究にご協力いただいた施設関係者の皆様に、この場をお借りして御礼申し上げます。

参考文献

1. Eva Stumpf, Erwin Breitenbach. Dolphin-Assisted Therapy with Parental Involvement for Children with Severe Disabilities. Further Evidence for a Family-Centered Theory for Effectiveness. *Anthrozoos*. 27(1): 95-109 (2014)

* 連絡先: sh.istk72@ruri.waseda.jp